

機関番号：34414

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520098

研究課題名(和文) 聖母戴冠の画家工房ネットワークにおける彩色系譜の研究

研究課題名(英文) Studies of Genealogy of the *Coloris* in the Network of Atelier of the Master of the Coronation of the Virgin

研究代表者 小林 典子 ( KOBAYASHI NORIKO )

大阪大谷大学・文学部・教授

研究者番号：80243137

研究成果の概要(和文)：3カ年を通し、毎夏季海外調査を実施し、仏・英・独・米国等の14機関に嚴重所蔵される聖母戴冠の画家系譜に関連する重要オリジナル全作品(13写本4板絵)の調査をほぼ完成することができた。その結果、この時期パリ写本彩飾挿絵工房において聖母戴冠の画家からブシコーの画家へと継承される系譜のうちに、油彩画完成を導く、彩色技法と顔料の抜本的革新が進行してきていることを明らかにした。その成果については、論文誌上や学会において発表を行った。

研究成果の概要(英文)：We conducted the prescribed research study as planned based on the research implementation plan during the three years, and were able to complete our investigations of almost all the original works of the Master of the Coronation of the Virgin (13 manuscripts and 4 panels) conserved in the 14 institutions in Western countries. Our results confirmed that fundamental reforms of *coloris* and pigments were in progress at that time in the Parisian manuscript ateliers regarding the genealogy of the Master of the Coronation of the Virgin including the atelier of the Master of the Boucicaut Hours. We were then able to announce these results in various papers and societies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：①美術史②写本彩飾挿絵③ファン・エイク④聖母戴冠の画家

⑤ブシコーの画家⑥ジャック・クヌ⑦ジャン・ルベグ技法書⑧彩色法

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、これまでに交付をうけた以下2つの科学研究費補助金と密接に関連し、その延長上に位置づけられるものである。

(1) 科学研究費補助金①平成14年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)：科学

研究費補助金(研究成果公開促進費)／平成14年度／学術図書(人文科学系哲学)『ヤン・ファン・エイク 光と空気の絵画』大阪大学出版会／研究代表者：小林典子／研究助成金：1,700,000円：和文,A4版,340ページ,700部,直接出版費3,339,315円,定価4,560円,発行年月日：平成15年2月18日

②平成 17~19 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)): 科学研究費補助金(基盤研究(C)) /平成 17 年~19 年度/研究課題名「前エイク期(ヤン・ファン・エイク以前)におけるパリ写本彩飾挿絵の研究」/研究代表者: 小林典子/研究助成金: 平成 17 年度 800,000 円,平成 18 年度 900,000 円,平成 19 年度 800,000 円。

以上 2 つの科学研究費は、平成 20 年度科学研究費計画調書の立案に際して密接に関連し、研究代表者の長年にわたる研究課題構想の持続展開を支え、今後の研究の全体的統合および完結に向けて可能性を開いてくれた。

(2) 研究計画を実施するに当たっての準備状況: 研究代表者がこれまでにこなしてきた予備的調査と研究(準備状況)については、以下のものがある。①すでに着手してきている関連写本ミニアチュールの調査状況: 研究代表者は 1984 年以来、断続的にはあるが 10 数回にわたり海外 10 数機関における写本ミニアチュールの調査研究を行ってきた。調査を通じて、前エイク期写本ミニアチュールの主要部分をアメリカ等を除いて一瞥し、そのおおよその全体像を把握することができた。②上記調査の成果として発表し、本研究課題のベースとなる既刊の主な関連論文、著書訳書約 20 編。③本研究課題に直接関連する準備状況: 『フィロカリア』第 7 号,1990; 『待兼山論叢』第 26 号,1992; 大谷女子短期大学紀要第 40 号,1996。

## 2. 研究の目的

パリ写本彩飾挿絵工房 1400 年から約 15 年間の歴史は絵画研究史上、特別な位置を占めている。パノフスキーやミース以来この期のミニアチュール研究は、近世絵画の成立期におけるもっとも革新的な、光と空気に満たされた感性的空間を描出した初期ネーデルラント絵画の創始者ヤン・ファン・エイクの直接的ルーツと考えられ精力的に推進されてきた。前エイク期(ヤン・ファン・エイク以前)と称されるこの期のミニアチュール研究、とりわけ彼(『トリノ=ミラノ時禱書』画家 G = ヤン)の直接的先駆とみなされているブシコーの画家の研究は、それゆえ、近世写実主義の誕生とその契機を探求するという美術史上の永年の課題に深く関連している。研究代表者はここ 20 年来このような課題と展望の上にならば、ヤン・ファン・エイク研究と、ブシコーの画家を中心とするパリ写本工房グループ作品の調査に邁進してきた。ところで、近年の欧米の研究は後に述べるように新たな諸相を浮上させてきている。研究代表者は、これら最新の研究動向を受け、H17-19 年度科学研究助成の交付を得て、聖母戴冠の画家工房および聖母戴冠の画家=貴婦人の

都の画家工房ネットワークを徹底的に調査し、実りある成果を得ることができた。本研究は、過去 3 年間の研究から抽出することができた同時代彩色技法の分析指標を軸として、さらに第 2 の、最終ステップである聖母戴冠の画家=ブシコーの画家工房ネットワークへと分析の歩を進め、上記永年の課題を、「彩色革命の系譜としての前エイク期ミニアチュール」という枠組みから再構築し、現時点における最も進んだ研究としてまとめ完成させることを目的としている。

(1) 欧米を中心とする新しい研究動向は、2004 年フランスを中心として行われた記念すべき大展覧会「パリ 1400 年展」カタログを中心に集約されてきている。最新の研究論評(アヴリル 2004, シャトレ 2000 プティ 2002-03 等)から注目される傾向は第一に、ヤン・ファン・エイクの直接的先駆として従来より指摘されている「ブシコー/マザリヌの画家」に加えて、もう一人の重要な画家すなわち「貴婦人の都の画家」の存在が最前線の画家としてクローズアップされてきたことである。第 2 に、これら 2 工房間ネットワーク現象をより具体的に、「聖母戴冠の画家に発する一連の彩色革命の系譜としてみなそう」(シャトレ 2000) という考え方がコンセンサスをもちはじめたことである。つまり、一連のこれらの興味深い論評のなかで、1400-1415 年ごろのパリ写本ミニアチュールの、まさにその創造的活動の中核が、聖母戴冠の画家に発する、貴婦人の都の画家とブシコーの画家グループの「芸術的共謀」=彩色革新にありと改めて位置づけられた。第 3 に、それとともに、科学調査の新たな新展開によりブシコーの画家工房パレットの特定と彩色技法の解明が初めて試みられた(プティ 2002-04)。

(2) 以上の 3 点の最新成果を受け、これをベースに研究代表者が行った過去 3 ヶ年(H16-19)の科学研究の成果は、主に次の約 4 点に集約することができる。まず、①クリスチーナ・ド・ピザン周辺の画家グループと貴婦人の都の画家工房についての調査研究を予定通り行うことができた。ついで、主要作品クリスチーナ・ド・ピザン『著作集』のモノグラフを完成し、これを国内外に発表(とりわけ、海外専門雑誌 *Art de l' enluminure* 誌第 18 号(2006)に出版)した。②現時点において聖母戴冠の画家に同定が試みられている(シャトレ 2000) 全 17 作品のオリジナル写本調査に着手し始めることができた。また、③もっとも重要なものとして、プティ/ギノー研究(2002)を受けて、近年の彩色研究の新しい道を探る方向—ミニアチュールの物理・化学調査の新展開とと

もに、中世技法書の重要な corpus 資料体に支えられての顔料研究へと歩をふみだすことができた。14.15 世紀パリ・ミニアチュール工房に明確に関連づけられる処方数は限られているが、同時代の色彩処方とりわけ、画家ジャック・クヌ（しばしばブシコーの画家その人と同定されてきた）が 1389 年パリにてアルケリウスに口述したという色彩技法書がジャン・ルベグ『色の書』BnF.ms.Lat.6741 中に一部収録転写され残されている。そこから研究代表者は、当時の色彩技法分析に必要な 5 つの主要な分析指標を抽出することができた。

(3) 具体的には、本研究は以下の 4 つの目標を掲げた。第 1 に、上記新たになった聖母戴冠の画家の色彩技法分析指標を、ブシコーの画家とりわけ彼の最大の功績とされてきた空気遠近法に適用し、パノフスキーの提起以来美術史上のアポリアでありつづける空気遠近法を技法的観点より解明することを試みる。第 2 に、そのための素材として、ブシコーの画家の空気遠近法上もっとも興味深い作品とされる『事物の特性の書』2 写本を、近年の学術成果（リベモンによる初の現代語訳 1999）を活用し、彩色技法に基づく個別作品研究として再構築し完成に導く。第 3 に、さらに、ブシコーの画家後期作品調査（近年、ブシコーの第二人格＝マザリンヌの画家作品であるとの仮説が提唱された）を完遂し、ブシコーの画家およびそのネットワークの画家たちを聖母戴冠の画家色彩系譜上にある現象として位置づけを試みる。さいごに、ヤン・ファン・エイクの出自であり直截の先駆の一つと注目されて久しい（リナ 1946-47）フランドルおよびムーズ川流域地方 1400 年周辺の一連の写本群についても、新たな分析対象に据え本格的調査を行う。

(4) 本研究課題は、以下の 3 点でこれまでにない学問的特質と規模を備えている。第 1 に、本研究は上述のように、リアリズム・プレ・エイキアン解明という観点からパリ写本研究を行うものであるが、それが彩色研究という最新の研究動向を進取し実験的試行を行うことにある。イコロジーの出現以来、中世・ルネサンス絵画研究は図像分析（テキスト＝イメージ）を中心に展開され、色彩の物理造形的分析はもっぱら近代以降にゆだねられてきた。だが、色彩とは、イメージの表出のために必要となる物理的媒体であり続ける。本研究は、これまで等閑に付されてきた観のある、この疑問点の検証から出発する。第 2 に、それが、抽象的・断片的考察に留まるものでなく、「有機的統合体としての写本」の最も具体的かつ詳細なモノグラフとして提出される。第 3 に、その契機を、同時代の

自然科学的言説（百科全書等）との関係において考察し、多元的展開を志向する点である。最終的に本研究は、聖母戴冠の画家＝貴婦人の都の画家＝ブシコーの画家工房をつなぐ工房ネットワークをテーマとして掲げる複数章からなる論考として完成される予定である。これによって、研究代表者の 20 余年にわたる課題＝パリ・ミニアチュールからヤン・ファン・エイクに至る近代表象形成へと至る過程が、実証を伴って浮上し、一応の集成完結をみるものと確信している。

### 3. 研究の方法

聖母戴冠の画家工房に端を発する彩色革命の系譜を、ブシコーの画家およびそのネットワークの画家たちの写本、さらに同時代フランドル画家たちの写本を調査対象にすえ解明を試みる。各年度ともまず第 1 に、複数国の複数施設に分散し厳重保管のもとに所蔵されているオリジナル作品群を、丹念に一つ一つ各施設を歴訪し調査研究していくことが必須となる。ついで、調査対象となった各写本に関する資料の収集、さらに、調査資料の整理と論文等の執筆およびその研究発表を行う。そのための具体的計画は以下のとおりである。

(1) 平成 20 年度の計画：初年度は、ブシコーの画家工房の彩色技法とりわけ、空気遠近法の形成と展開に照準をあて、そのための重要な位置を占める作品、バルトロメウス・アングリクス著『事物の特性の書』2 写本 (Fr. 9141, MS. 251) のモノグラフを最新のものとすることに傾注する。また、聖母戴冠の画家 2 作品を調査し、全作品調査を完遂する。①前半期：夏季 8 月～9 月にかけて海外調査研究をおこなう。①-1 写本ミニアチュールの調査：フランス国立図書館（パリ調査旅行）；ジャクマル・アンドレ美術館（パリ調査旅行）；フィツウイリアム美術館（ケンブリッジ調査旅行）；大英図書館（ロンドン調査旅行）；ヴォルフエンビュテル・アウグスト図書館（ドイツ調査旅行）；クリーヴランド美術館（クリーヴランド調査旅行）；ワシントン・ナショナルギャラリー（ワシントン）①-2 文献・資料調査：フランス国立図書館；国立美術史研究所 INHA ①-3 研究者訪問：欧米の主要な研究者と意見交換等をおこなうため、数名の研究者を訪問する。②後半期：海外調査から帰国後の計画：帰国後は、海外調査の資料の整理と、収集した文献の読破を迅速に行い、調査結果や研究者訪問で得た意見等を反映させながら論文の執筆および研究発表。

(2) 平成 21 年度の計画：当年度においては、1407-1420 年頃一気に開花した、ブシコ

一の画家工房とそのネットワークの画家たち（エジャートン、ベッドフォード、リュッソン、オロシウス等）の空気遠近法および室内表現に関して、彩色技法から分析を行い再構築を試みる。とりわけ、マザリンヌの画家オリジナル作品の調査を行う。①前半期：夏季8月～9月にかけて海外調査をおこなう：①-1 写本ミニアチュール調査：ボドゥリアン図書館（オクスフォード調査旅行）；マザリンヌ図書館；フランス国立図書館；アルスナル図書館（パリ調査旅行）①-2 文献資料調査：マザリンヌ図書館；フランス国立図書館／国立美術史研究所 INHA ①-3 研究者訪問；②後半期：海外調査から帰国後の計画：帰国後は、海外調査の資料の整理と収集した文献の読破をおこない、ブシコーの画家工房とそのネットワークの画家工房の彩色技法の見解をまとめる。論文の執筆と完成、および研究発表。

（3）平成22年最終年度の計画：最終年度は、フランドル・ムーズ川流域1400年周辺のプレ・エイキアン写本群について、聖母戴冠の画家彩色技法の観点から調査と研究に集中する。①前半期：同様に、夏季8月～9月にかけて海外調査をおこなう。①-1 写本ミニアチュールの調査：フランス国立図書館（パリ調査旅行）；ブリュッセル王立図書館（ブリュッセル調査旅行）；グラスゴー大学図書館（グラスゴー調査旅行）；コートールド美術研究所（ロンドン調査旅行）；ツェンテ国立美術館（エンスヘーデ調査旅行）①-2 文献・資料調査：フランス国立図書館；国立美術史研究所 INHA；①-3 研究者訪問；②後半期：海外調査から帰国後の計画：帰国後は、資料の整理と収集した文献の読破を行ない、プレ・エイキアン写本群に関する論をまとめる。以上の3ヵ年にわたる調査と研究の成果を総合し、その成果については、内外での学会発表をおこない、本研究と同タイトルをもつ総合的著作として完成すべく、ただちに執筆に向かう。なお、オリジナル写本の調査が主軸となる本研究の性格から、当初計画どおりに進まない場合が考えられるが（所蔵機関の臨時休館や当該写本の他館での特別展示あるいは、ファクシミリ出版の普及とともにオリジナル写本の開示条件がますます厳格化する今日的状況等）、それを予定回避するために、同じ地域や国、施設に所蔵の写本類は、各年度計画から越境させ同一年度に合わせて、前倒しに調査を実施する（あるいは、状況によっては、平成21年度と22年度の計画を入れ替えて実施する）ことも考えられる。

#### 4. 研究成果

（1）H. 20 年度：初年度にあたる当年度は、まず、ブシコーの画家工房の彩色技法とりわ

け、空気遠近法の形成と展開に照準をあて、重要関連諸写本の調査（イギリス、ドイツ、フランス方面）を予定通り行うことができた。ついで、聖母戴冠の画家の全作品調査を完成させるべく米国方面への調査を行い（ワシントンの1板絵をのぞき）ほぼその目的を達成することができた。さらに、聖母戴冠の画家彩色法に関して、現時点での調査成果を論文にまとめた。具体的には、①前半期：夏季8月～9月にかけて海外調査研究を行った。調査を行った日程、訪れた機関、調査対象作については：①-1 写本ミニアチュール調査：8月11日 シャンティイ図書館／8月14-15日 ヴォルフェンビュテル・アウグスト図書館 『事物の特性の書』Cod. Guelf／8月18-21日 大英図書館：Egerton 1070/Add. 29433 写本他／8月27-29日 クリーヴランド美術館：『ミサ典書』Fond. 62. 287/ 『シャルル・ル・ノーブルの時禱書』MS. 64. 40 写本他／8月29-31日 ワシントン・ナショナルギャラリー／パリ、フランス国立図書館：『事物の特性の書』Fr. 9141/Fr. 22531 写本他調査、①-2 文献資料調査：フランス国立図書館；国立美術史研究所 INHA、①-3 研究者訪問：ストラスブール大学 A. シャトレ名誉教授；フランス国立図書館研究員 I. V. プティ氏、M. T. グセ氏等と意見や情報交換を行った。②後半期：海外調査から帰国後：帰国後は②-1 聖母戴冠の画家彩色系譜について論文を執筆（小林2009）さらに②-2 『事物の特性の書』の2写本はじめ関連諸写本調査結果の整理および図版・資料収集、論説の見直し修正補足を行った。

（2）H. 21 年度：まず、ブシコーの画家工房とそのネットワークの画家たちの彩色技法の分析をおこない再構築を試みるため、重要関連諸写本の調査（イギリス、フランス方面）を予定通り行うことができた。とりわけ最も重要な2写本—ブシコーの画家の基幹作品ならびにマザリンヌの画家作品—の調査を行い、その目的を達成することができた。さらに、聖母戴冠の画家の彩色法に関して、現時点での調査成果を論文にまとめた。具体的には、①前半期：夏季8月～9月にかけて海外調査研究を行った。調査を行った日程、訪れた機関、調査対象作品については：

①-1 写本ミニアチュール調査：8月10日 ジャクマール・アンドレ美術館：『ブシコー元帥の時禱書』ms. 2／8月11日～フランス国立図書館：lat. 3107 写本/lat. 10538 写本他／8月17～20日 マザリンヌ図書館：『マザリンヌ時禱書』MS. 469 写本他／8月24～26日 オクスフォード・ボドゥリアン図書館：『時禱書』Douce144 他／8月27日 ケンブリッジ・フィツウィリアム美術館：『事物の特性の書』MS. 251／8月28～29日 大英図書

館：『時禱書』Add. 16997 写本他,

①-2 文献・資料調査：マザリヌス図書館；フランス国立図書館；フランス国立美術史研究所 INHA, ①-3 研究者訪問：ストラスブール大学 A. シャトレ名誉教授；フランス国立図書館研究員 I. V. プティ氏等と意見や情報交換を行った。②後半期：海外調査から帰国後：帰国後は②-1 海外調査の資料の整理と収集した文献の読破を行い、②-2 ブシコーの画家工房とそのネットワーク画家工房の彩色技法について論文を執筆し（小林 2010）②-3 「第 6 回ネーデルラント美術研究会」発表, 2009. 7. 19（大阪大谷大学）および集中講義（東京芸術大学, 2009. 11. 18）等において、その最新知見の発表を行った。

（3）H. 22 年度：最終年度の当年度は、フランドル・ムーズ川流域 1400 年周辺のプレ・エイキアン写本群について、重要関連諸写本の調査を予定通り行うことができた。具体的には、①前半期：夏季 8 月～9 月にかけて海外調査を行った。調査を行った日程、訪れた機関、調査対象作品については、①-1 写本 ミニアチュールの調査：8 月 11～14 日ブリュッセル王立図書館：ms. II 7831/ms. 10176-78/ ms. 11041/ ms. II 138 写本他/ 8 月 16 ブルージュ, セミナリオ：ms. 72. 175/ms. 64. 183/ms. 66. 35/ 8 月 25～28 日 ロンドン大英図書館：Add. MS. 18213/Add. MS. 27948/Royal MS. 2AXVIII/Royal MS. 2A VIII/Sloane MS. 2684/Add. MS. 29704, 29705, 44892/Royal MS. 1 E. ix/ Add. MS. 16998/Add. MS. 42131/ 8 月 31 日～9 月 1 日 グラスゴー大学図書館：MS. Gen. III/ 板絵作品調査ヘント「神秘の子羊の祭壇画」他多数  
①-2 文献・資料調査：フランス国立図書館；フランス国立美術史研究所 INHA；フランス国立歴史文書研究所 IRHT, CNRS 他①-3 研究者訪問：ストラスブール大学 A. シャトレ名誉教授；フランス国立図書館研究員 I. V. プティ氏；IRHT 研究員スティルヌマン氏等と意見や情報交換を行った。②後半期：海外調査から帰国後：帰国後は、②-1 資料の整理と収集文献の読破を行い、②-2 本務校紀要論文を執筆（2012 年 3 月出版予定）②-3 集中講義（東京芸術大学, 2011. 1. 6）②-4 「美学会西部会」発表 2011 年 6 月 4 日（京都大学）等において、その最新知見の発表を行った。②-5 シンポジウム「色彩研究の現在」（仮題）2011 年 12 月 3 日, 大阪大谷大学開催を予定している。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①小林典子「画家ジャック・クヌー ドキュメント再考—1400 年前後パリ／ロンバルディア／アラゴンの 3 つの宮廷をめぐる彩色システム—(1)」『大阪大谷大学文化財研究』査読無, 第 11 号, 2011（出版予定）

②小林典子「ジャン・ルベール集成『色の書』にみるジャック・クヌーの技法書（レシピ）—14-15 世紀フランス古文獻とパリ・ミニアチュール彩色法の刷新—〔3〕」『大阪大谷大学文化財研究』査読無, 第 10 号, 2010, 1-50 ページ

③小林典子「ジャン・ルベール集成『色の書』にみるジャック・クヌーの技法書（レシピ）—14-15 世紀フランス古文獻とパリ・ミニアチュール彩色法の刷新—〔2〕」『大阪大谷大学文化財研究』査読無, 第 9 号, 2009, 1-59 ページ

④小林典子「ヤン・ファン・エイクとフェルメール—光の描出の系譜／“光学的精微の大全”をどのように記述できるのか？」『ユリイカ』査読無, 第 8 巻, 2008, 206-222 ページ

〔学会発表〕（計 2 件）

①小林典子「緑と赤のグラシの創出へ—前エイク期におけるジャック・クヌー技法書とパリ写本彩飾挿絵彩色法の刷新—」『第 283 回美学会西部会研究発表』2011 年 6 月 4 日, 京都大学

②小林典子「14-15 世紀フランス絵画技法書とパリ・ミニアチュール彩色法の刷新—ブシコーの画家と聖母戴冠の画家を中心に—」『第 6 回ネーデルラント美術研究会』2009 年 7 月 19 日, 大阪大谷大学

〔その他〕

①小林典子「前エイク時代（ヤン・ファン・エイク以前）におけるパリ写本彩飾挿絵の彩色技法(2)—フランスグループによる第 2 次物理・化学調査活動を中心に—」東京芸術大学美術史学部集中講義, 2011 年 1 月 6 日

②小林典子「前エイク時代（ヤン・ファン・エイク以前）におけるパリ写本彩飾挿絵の絵画技術」東京芸術大学美術史学部集中講義, 2009 年 11 月 18 日

③小林典子「シンポジウム「色彩研究の現在」」（仮題）2011 年 12 月 3 日, 大阪大谷大学（開催予定）

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小林 典子 ( KOBAYASHI NORIKO )  
大阪大谷大学・文学部・教授  
研究者番号：80243137